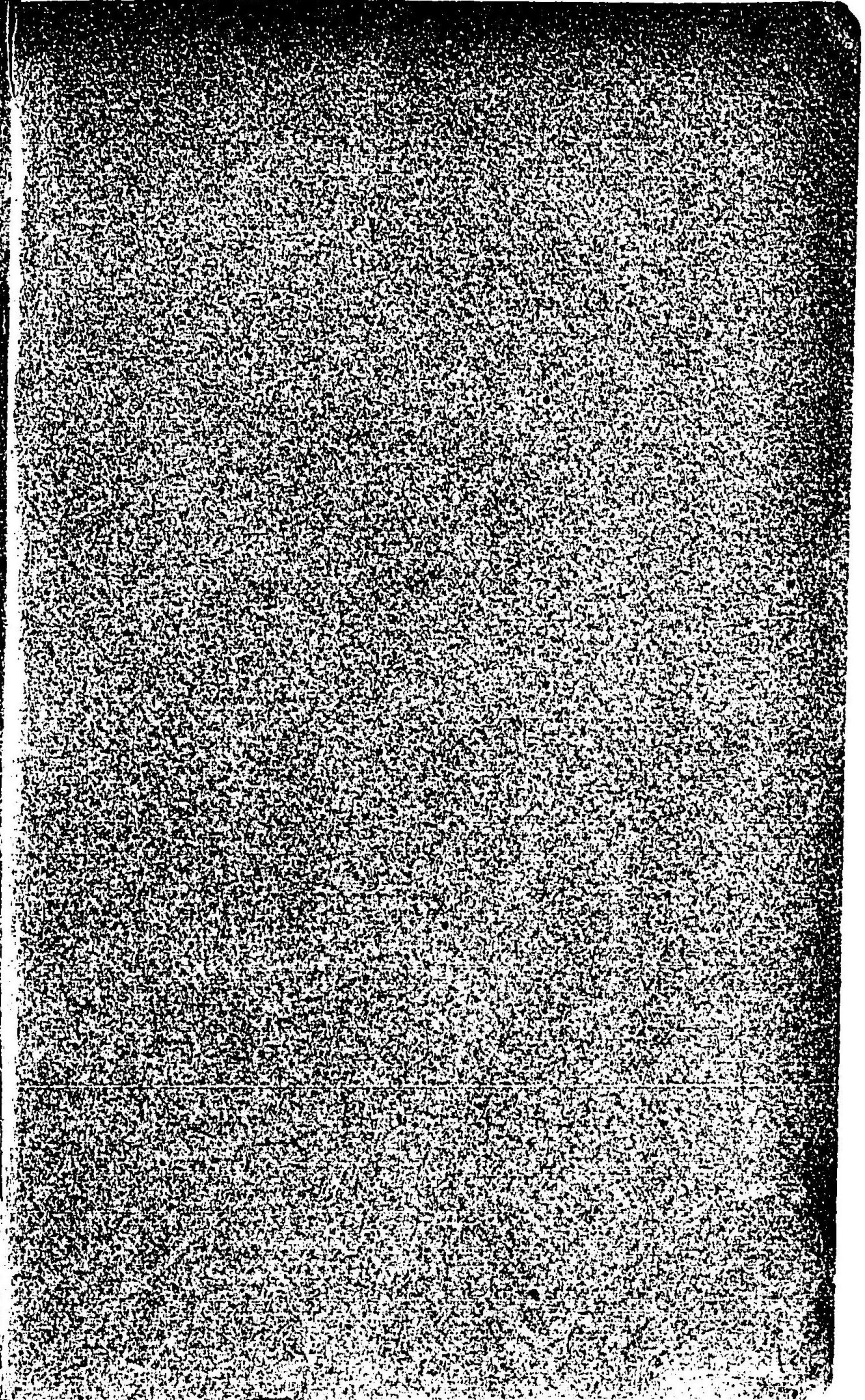


鐵幹與謝野寬著

天地玄黃

東京 明治書院



世音

二竟

青酌樽雨中

石坡道人钱

病胎



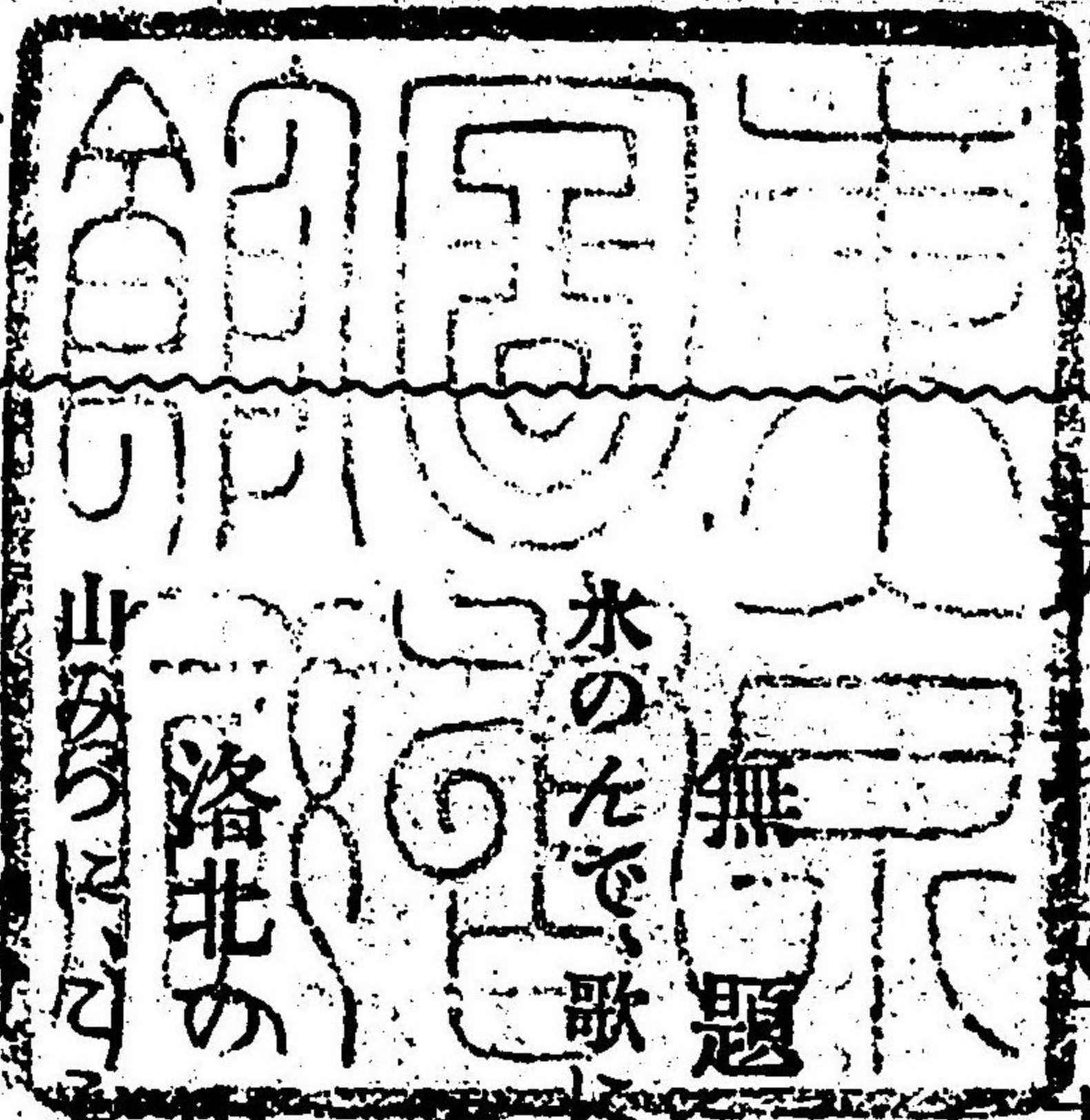
例言

一、例により、俗忙間になれる短歌新體詩を、雑然として、個の冊子に輯む。これを一年の後に見むか、著者自らも亦、その糊塗補綴の跡を悔ゆるものあるべし。敢て爰に公にする所以のものも他なし、昭代の文壇、細心燭眼なる評家、雲の如きに當り、その懸懸痛切なる示教を得て、以て他日の玉成に徳とする所あらむとする也。

一、昨夏「東西南北」を出すや、世の評家多く争う

て褒貶の辭を賜ふ。過分の榮譽い、永く小生の銘
 記して感謝するところ也。抑も病未だ膏肓に入
 らざるの前、諸醫ひさしく針を按ず。「鶴歌」「語粗
 意淺」「輕浮」「露骨」等の雜駁なる興奮劑にさゞま
 らずして今數倍深刻なる御手術に逢はむこと
 を願ふのみ。

明治三十年一月相陽逗子の客舎に於て、 著者しるす。



天地玄黃

鐵幹著

無題

水のたで、歌に枯れたる、我が骨を、
 拾ひて叩く、人の子もがな。

洛北の山栖に題す。

るをすます、宿なれば、
 月より外に、さす影もなし。

我[○]起[○]世[○]
 の[○]き[○]に[○]同[○]
 寐[○]出[○]調[○]
 な[○]で[○]の[○]
 が[○]將[○]知[○]
 ら[○]た[○]已[○]
 萬[○]何[○]な[○]
 年[○]か[○]く[○]
 の[○]せ[○]ひ[○]

鳥[○]誰[○]水[○]何[○]
 の[○]を[○]の[○]を[○]を[○]
 林[○]待[○]小[○]求[○]
 を[○]ち[○]川[○]め[○]
 啼[○]得[○]を[○]て[○]
 き[○]か[○]流[○]さ[○]
 め[○]い[○]れ[○]ら[○]
 ぐ[○]い[○]も[○]ら[○]
 る[○]ど[○]く[○]ど[○]

一[○]嵐[○]
 時[○]の[○]
 に[○]神[○]
 裂[○]の[○]
 く[○]音[○]
 の[○]づ[○]
 概[○]ら[○]
 あ[○]れ[○]
 ら[○]て[○]
 む[○]

山中の石

一[○]星[○]
 百[○]の[○]
 五[○]都[○]
 絃[○]に[○]
 の[○]あ[○]
 玉[○]り[○]
 の[○]と[○]
 琴[○]く[○]

達[○]少[○]
 人[○]女[○]
 耳[○]の[○]
 を[○]絃[○]
 を[○]に[○]
 か[○]の[○]
 た[○]ら[○]
 中[○]ぶ[○]
 空[○]け[○]
 の[○]て[○]

こ[○]の[○]
 の[○]聲[○]
 よ[○]の[○]
 し[○]や[○]
 人[○]間[○]
 の[○]の[○]

敲[○]か[○]
 ぱ[○]我[○]
 も[○]聲[○]
 あ[○]あ[○]
 間[○]の[○]
 の[○]ひ[○]

ふ[○]る[○]
 く[○]頑[○]
 た[○]る[○]
 山[○]の[○]
 の[○]石[○]

風○雨○に○夢○も○破○ら○せ○ず、
神○の○加○護○あ○る○無○始○の○世○の、
破○格○奇○想○の○詩○一○篇、
苦○の○み○ど○り○の○薄○絹○に、
包○み○て○山○に○獨○り○臥○す。

世○の○詩○に○飽○か○ぬ○友○よ○い○ざ、
行○て○太○古○の○石○に○問○へ、
か○れ○の○雲○あ○る○深○山○よ○り、
曾○て○此○語○を○寄○せ○に○けり。

夢中、一首を得たり。

梅の花、ひとつこぼれて、往ににけり。

早きながれの、水の清きに。

弦月

世になれぬ、人のたぐひか。ともすれば、

雲にのがるる、三日月の影。

明治廿九年十月八日、諸友と飲む。諸友
みな、前年の十月に於て、朝鮮景福宮の
變に遭逢せるもの。談、半島の近事に及

ふや、黙然とし泣下らざるなし。この夜、
天陰る。

よき人の、かばねを袖に、掩ひたる、

その夜おもへば、月もくもりぬ。

酒ふけて、ともし火くらし。太刀の前に、

友ものいはず。われものいはず。

女に代りて。

たのめおきて、仇ならびいざ、うちつけに、

忘れむとしも、君の言ひてよ。

男に代りて、返し。

さりともど、たのむのおのが、まよひにて、

忘れむ方や、なさけなるらむ。

名所時雨 (題詠)

よそに見ば、ただ一村の、雲ならむ。

時雨にそぼつ、笠ぬひの里。

獨尊子との連歌の中に。

鷲のとぶ、北の荒野に、旅寐して、
銃の音さく、夢もありけり。』

(獨尊)

(鐵幹)

書かみのよむども、甲斐やなからむ。
 妻子をバ、飢に泣かせて、幾いくち千卷、
 世にかくれ簀、さるよしもがな。
 すねものと、人の誹らぬ、程こそあれ、
 人の皮さる、鬼もありけり。
 福の内に、何とか祈る、聲のして、
 貰ひ泣する、少女もがな。
 太刀なでて、我泣く夜半の、酒の前に、
 (獨) (鐵) (獨) (鐵) (獨) (鐵) (獨) (鐵)

東海道の瀛車中にてよめる
 歌の中に。

富士くろく、水海しろき、月の夜に、
 琵琶の音ねさえて、船一つ出づ。

月夜、雁の下るを見て。
 玉づさを、鏡にてらす、こちちして、
 月を横さる、雁のひとりら。

澁谷の里に虫をさして。
 戀ひわびて、消えにし誰の、かたみぞや。
 露けき野邊の、松虫のこゑ。

無題

そことなく、花の香おくる、夕かせに、

おのが心も、たぐへやらばや。

鎮○守○の○森○を○川○で○し○に○
 立○つ○鳴○も○な○し○畑○の○中○
 牛○し○か○る○子○や○歸○り○の○中○
 堤○し○ぐ○れ○て○日○の○暮○れ○ぬ○
 蓼○の○花○さ○く○里○川○の○
 惆○悵○
 横○に○籠○め○た○る○霧○の○上○
 赤○銅○の○色○あ○か○か○ど○
 一○輪○の○月○出○で○に○け○り○

憶○へ○袖○に○風○か○を○る○
 桂○の○花○の○下○か○げ○に○
 姫○ど○は○じ○め○て○語○ら○ひ○し○
 その○夜○も○お○な○じ○月○の○夜○半○
 月○に○の○雲○の○障○る○ど○も○
 ふ○た○り○の○す○る○じ○塵○を○だ○に○

天^{あま}我^{われ}つ^つ高^{たか}
な^な世^よた^たき^き
る^るに^にへ^へあ^あ
戀^{こひ}の^の雁^{かり}
の^のよ^よみ^みが^が
た^たや^や

き^き露^{つゆ}か^か引^ひ
く^くど^どけ^け板^{いた}
の^のま^ま砕^{くだ}て^ての^の
こ^こま^まけ^け頼^{たの}鳴^な
と^とこ^こい^いみ^み子^こ
か^か秋^{あき}の^の風^{かぜ}

足^{あし}
ら^ら
は^は
ぬ^ぬ
願^{ねが}
ひ^ひ
猶^{なほ}
一^{ひと}
つ^つ

こ^こ鋤^あ田^た
の^の世^よた^たの^のし^し
き^き中^{なか}に^にし^し
も^も

別^{わか}か^かは^は契^{せき}
れ^れた^たつ^つり^り
て^てわ^わか^かし^し
こ^これ^れに^にこ^こ
に^にの^の見^みど^ど
早^{はや}や^や三^{さん}
と^とせ^せ

ふ^ふ月^{つき}
た^たり^り
の^のす^す
ま^ま
ま^ま
圓^{まる}
満^{まん}
に^に
て^て

月○の○ひ○か○り○の○ま○さ○れ○ど○も○
心○の○や○み○に○夜○も○す○が○ら○
蓄○花○の○雪○ち○る○野○づ○か○さ○を○
め○ぐ○り○て○明○す○唯○一○人○

無題

今のただ、岩間の清水、木がくれて、
心も身をも、碎くべきかな。

秋 曉

里川の、ふたもと柳、かけ瘦せそ、
霧にしめれる、有明の月。

無題

人のただ、あはれと笑みて、やみぬとも、
言はであるべき、事ならなくに。

某に與ふ。

罵りて、わかれし友よ、をりくひ、
忍泣する、夜半もあるらむ。

大友歌次と別る。

世がたりを、またも重ねむ。鴨のなく、

根岸の里の、雪の夕暮。

題 畫

出でて行く、月もしばしり、よどむらむ。

菊の露ちる、山川の水。

僧元恭を送る。

あゝ、蕞爾たる小島國、

奇才を容る、地はあらず。
行けよ、行け、
崑崙の山雪さえて、
恒河のなれ浪あらし。
丈夫稜々の俠骨を、
さらすに不足あるべきや。
一片の袈裟革命の、
血潮の旗に染ぬ出で、
慈悲忍辱の金剛杖、
太刀に代へむも面白し。
大我がやがて無我にして、

惡魔の菩薩の變化とか。
 人を殺すも人を活かす、
 佛意にかなふ道理あり。
 曠世の志、斗大の膽、
 人の無頼と云はば云へ、
 成るも成らぬも試みて、
 斃れて後にさて已まじ。
 はからず今夜相逢て、
 阿々一笑す酒の前、
 いでや盡せよ一杯を、
 生別死別また問はじ。

周防徳山の入江石泉居士の、ありが
 たき有徳の翁におはしける上に、ま
 た二なき西方の行者にておはしき。
 由來、眞言にあかず法華にあかず、去
 て禪を修するも亦、悟る能はざりし
 小生が、一朝、眞宗浄土の念佛門に入
 て、踊躍歎喜の地に住するを得たる
 もの、まことに居士が前年の勤化に
 負ふところ多しとす。今ここに明治
 三十年一月、居士が一週年の忌辰に

當り、令嗣彌作君、書を寄せて法樂の
 歌を徵せらる。乃ち、左の一首を賦す。
 阿彌陀佛と十こそ申さむ。亡き人を、

しのぶ胸にも、ほとけ宿れり。

妹のもとへ、僑居の秋景色など
 を、かきやるついでに。

玉ならば袖につつみて、おくらばや。

わがすむ野邊の、鈴虫のこゑ。

無題

ながらへば、人のつらさも、なほるやと、

惜しからぬ身を、なほ惜むかな。

金子薫園子、わが歌の舊稿ども
 を、蒐めくれらる。

歌かける、反古もつもらば、山となりて、

そこにけ紅き、花もさくらむ。

海嘯

(明治廿九年六月廿一日作)

下りはてたる世の中に、

けがれはてたる人ごころ、
 思へばためしあら浪の、
 斯る不思議も見るものか。
 道のひかりの消えはてて、
 世の暗かりに成りてより、
 魔王のおのが時ぞどや、
 かるく笑ひぬ冷やかに。
 その右の手に神ありて、
 人の愛をば裂かむとし、
 左の手にも神ありて、
 人のいき血を吸はむとす。

その右の手をあぐる時、
 大地の横に揺れ出でて、
 山も裂くるかかうかうと、
 震ふひびきの凄まじさ。
 人のこゝろも身にそはず、
 慌てふためく折しもあれ、
 魔王左の手をふれば、
 海の斜めにかたふきて、
 あはれと叫ぶほどもなく、
 逆立つ浪の五千丈、
 さてり二たび澎湃と、

大地を掛けて落ちてかかり、
 人もすみかもちりどりに、
 秋の木の葉と、ぼひつ、
 あぐる悲鳴のもろとるも、
 嬉しと魔王の聞くならむ。
 かかる中にも愛惜の、
 なさげのさても可憐しや。
 親のわが子を子の親を、
 妻のわが夫を夫の妻を、
 共にもとめて聲たてて、
 呼べと叫べと甲斐もなく、

救ふ佛のあらばこそ、
 見る見る沖に流れゆく。
 魔王の身より火を出し、
 人の歎きを照し見て、
 心地よげなる頬のあたり、
 紅さの壓ける血の痕か。
 今のと聞の室に入り、
 またも暫しの眠るらむ。
 魔王の姿かき消えて、
 浪の程なく引きしかど、
 浪の洗へるそのあとの、

里のうもれて沼となり、
 非命に死せる人のかず、
 五万とさくも浅ましや。
 變をつたふる三陸の、
 飛電上下を泣かすれど、
 南の島にもうらうらと、
 酒に妓樂の宴を張り、
 酔で太平の歌をさく、
 宰臣の洪量君の見よ。
 親をうしなひ子に別れ、
 身に手を負ひて飢に泣く、

不幸の民の三陸の、
 その海邊にさまよへど、
 宇治の名所の旅やかた、
 るよひ観望の客を延さ、
 數度の飛電に驚かぬ、
 黨人の風流君の見よ。

斷腸錄 (抄出)

廿九年九月二日、母上の御病あつしとの
 電報いたり、倉皇として郷里西京に歸る。
 家に入れば、はや絶え入り給ひて、一日を

經たり。及ばざるを悔むも甲斐なく、あまりの悲しさに、暫しの涙も出でず。あゝ兒や、總角の年を以て、膝下を辭し、東西に流泊する。茲に十五年、たましく郷を過ぎて慈顔を拜するも、近侍すること、二旬より多きりあらず。しかも書生の志すところ、世と乖離し、壯語益多くして、實行益難きを奈何せむ。蹉跌また蹉跌、屢、慈懷を惱して、未だ一日も秀眉を開かせまつらざるなど、兒が罪のふかさ、測るべからずと謂ふべし。思ひつづくれれば、千恨万悔、

九腸ために寸斷せむとす。夜に入り、僧來りて、經を御枕邊に誦す。われも念珠つまぐりて、觀無量壽經を誦し終り、さて偈に代へて、二首を佛前に捧ぐ。

たらちねの、耳しひてこそ、いましたれ。

高く喚びてよ。西のみほとけ。

次の夜、枕邊に伽して。

吾妻の旅路はるばると、
比叡の麓に歸り來て、
わがやを見れば玉床の、

ほかを向きます母の顔。

あはれ終に誰も行く、
道との兼てきさしかど、
歸れと文をたまはりし、
昨日やうつ今日や夢。

夢のなめますことおもやど、
床の邊ならすおもらへが、
すさもる月の影やせて、
壁に來て鳴くさうしす。

おなじおはれの露の身の、
消えあらしそふ世のさまか。

袖のよそなる木からしの、
いつ音づれてさそひはひ。
よべと歎けどたらちねの、
長さねむりのなめまます。
ただのひと言わが名をも、
召し給はざる淋しさよ。

おもへがここに拾餘年、

西にひがしにさまよひて、
みそは遠くも離れたる、
わが罪いかに深からむ。
せめて一度の伴ひて、
都の花も見すべきに、
旅の憂目を聞かせて、
いくたび母を泣かせけむ。

名をわけ家を興せよの、
そのみをしへり忘れぬと、

狷狂人けんきやうに容れられず、
世ぬたる道のつたなきを、
思ふところの一つだに、
猶なし遂げぬちをしむ。

母の御魂よあはれども、
わが子の姿みそなはせ。
かなしや秋のなが月、
ななき恨の名なりけり。
萩の下葉をながめつつ、
ひとりある身と成はてて、

夜寒のいどいどまされど、
袷衣を着する人もなし。

おなせが三首。

生ひささの榮文見せよと、我かしら、

母の御影もなほと育てし、母にやりませぬ。

この世に、さらでも耻の、多き身を、

節を、しるはれ今よ、母なしにして。

世御棺を、東山の西大谷に、

母を、めまひりて。

清麗さて、寝たるすがたを、嘆ひたる、

ひがしの山に、母ねむりませ。

臨終の折のことなきを、

兄たち、みまくらはず、なまらひて、

なごか冥路を、とどめかねけむ。

たらちねを、山におくりて、その山に、

物おもひをれば、秋の風よく。

式。また

忘れての、むなしき床に、末の子の、

召すかと問ふも、悲しかりけり。

式。また

ありし世の、はかなきことも、今更に、

語りいぞてり、しほる袖かな。

手匣に、遺稿のおん歌あり。

書きよした、をきみ給へる、夫の句を、

いく世まらてか、復もさくへき。

母上の子を育てたまひしこと、極めて
嚴正にして、些の過怠あるも假借した
まはず。人或い、その苛酷に傾くを議す
るものありき。常にのたまひけるい、男
子の武骨に生ひ立てよ。女々しき振舞
あるべからず。十二歳にして、他人の家
に苦勞し、十七歳にして、獨立自營の志
あるべし。久しく父母の膝下に戀々た
るが如きい、丈夫の器にあらず云云と。

されば、余の兄弟六人、末の一女を除く
 の他、一人として八九歳の交に於て、家
 を離れざるのなかりき。老年にのぞみ、
 茶話の上にのたまひけるに、母の亥の
 歳の生れなり。亥の野猪なれば、わが性
 の我強くして、子を育つるに厳しかり
 し所以なりとて、笑ひたまひぬ。さるこ
 となどを憶ひ出でて。

いかり猪の、かへりみいせぬ、雄ごころも、

我ものならず、母のたまもの。

三たび京城に赴かむとして、このなげ
 きあり。暫しの彼國へも渡すがたけれ
 ば、そのよしを、全羅道にある槐園のも
 とに言ひやるとて。

秋かせに、遠くへ行かじ。やらちねの。

御墓の霜を、誰か掃はむ。

都に上る途次、瀛車の、御殿場を過ぐる
 に、ひと度富士を見たしなど、生前にの
 たまひしことを憶ひ出でて。

人の子の、ふかさ恨も、つもるかな。

母の見まさぬ、富士のしら雪。

仁徳帝の陵に詣でける歸途、
和泉の濱寺の沖を望みて。

磯松の、こずゑに阿波の、海見えて、

清秋 船一つ行く。秋霧の上を。

涼を根津の神泉亭に取る。

河骨かわほねの、さけるあたりり、水さよし。

水鶏や待たむ。月や浮べむ。

三つたてまつりて、

洛北の山栖にありて。

桐の葉の、一つちりらく、山の井に、

月の影くむ、あざほらけかな。

京畿道の三角山に

宿れる夜。三首。(廿八年十二月作)

おぼる夜に、梅の花ふむ、こちして、

夕霜しるき、山かげの道。

山かせり、時雨に松を、染めかねて、

はての雪をも、さそひけらしな。

しら雪の、幾重もつもれ。雪に寝て、
山はなほ燃ゆるところを、しばし抑へむ。

題 畫

笛の音の、あるじを訪へば、柴垣に、
梅の花ちる、ところなりけり。

亡き母を懐ふ。二首。

木枯の、かかるもふべに、たらちねの、
とさ洗ひぎぬ、我にさせけむ。
傘の上に、ひと葉こぼるる、もみぢ葉を、
はげそとよぶも、悲しかりけり。

無 題

はらからも、たまたま我れを、うたがひぬ。
世に問はれぬも、ことわりにして。

人 鬼

少女の膝に、酔ひ臥して、
目覺めて、渴を呼ばむ時、
暗き火影を、掻いたてて、
先づ此歌を、口にせよ。

主をかたるいどやすく
 いかしの恩を打すてい
 權家の妾と爲さば爲す
 母の愛兒の妹も
 人の師をなす伯父をしも
 敵に契がば契くべく
 三たびの食を二たびに
 減するをさへ忍ぶなり
 迷いくつをれり父母の
 王たびの食を二たびに

黄金の爲と見るからん
 黄金の爲に世に出でて
 黄金の爲に世に出でて
 人の知らねど我の唯
 拙き問ひを爲すものか
 我ど生れて出でぬらむに
 我ど生れて出でぬらむに
 人ど生れて出でぬらむに
 人ど生れて出でぬらむに

今日かのななさけを仇にして
友を售らむの猶やすし。

黄金の鑊の身は久けて
妻にも心もるさぬを
笑止や天外世を舉げて
我に心をもるじつい

國の安危を身に荷ふ
天下の議員の入る
世の正邪を口にする

天下の事考をのたま

畫の都門に鷹揚の
駒馬の車を驅りながら、
夜の腰を七重八重
扱めてひれ伏す我が門に

おさて笑止け砂利の如く
さるがりあらく小文士
黄金の前にぬかづさて
我が笑顔をみさすけしと

不偏不黨を名におへる、
新紙の上は耻もなく、
わが行ひのかましくを、
疵護ひて書けり太き字に。

世の刑律は我ために、
黄金をまもる城にして、
世の法官は我ために、
黄金をまもる兵士なり。

不偏不黨を名におへる、

一たびこゝに戦へば、
嵐にそよぐ木の葉武者、
音を聞かしても降るなり。

力をたのむ荒武者は、
さすがに暫し打組めど、
四合五合とかさなれば、
討死せぬなかりけり。

謠ひてこゝに到る時、
心はいかに驕るらむ。

水にのんぞをうるほして、
更につづけよ次の句を。

黄金の人の何なれ、
かばかり人の何なれ、
黄金の人の何なれ、
かばかり人の何なれ、
黄金の人の何なれ、
かばかり人の何なれ、
黄金の人の何なれ、
かばかり人の何なれ、

またも拙きこの問ひや、
人の知らぬと我がこそ、
世の樂に飽かむとて、

かくも黄金を愛づるなれ。

黄金のなかに世ありて、
黄金の外にこの世なし。
見よ王侯のたふどきも、
このものなくは何かせむ。

丸木の殿に歌よみて、
民のなげきを思すとも、
こゝろ筑紫の仇波の、
いつも颯風をたのまむや。

夜のおとどのおたたく、
夢しづかなる御枕に、
くねれる人のいびきを、
聞き召さじとおぼすとも、

黄金しなくばいかにして、
世の武夫を召しまさむ。
大御心のしづまるも、
國に黄金のあればなり。

身のよし匹夫の賤しきも、
黄金の徳のたかければ、
おぼえめでたき宰相も、
笑うて手を握りつゝ。

目の一文字の學なきも、
黄金の徳のたかければ、
もの博士も我ために、
召して奴とこそ使ふ。

我いたもてる戒なきも、

底のいさごのしる金に、
珊瑚の橋のまばらに、
もく流るゝ瑠璃の水、

うつらうつらと歩む、
天女の樂の音さきて、
紫雲たなびく大空を、
謠ひてこゝにいたる時、

行くに馬車あり臥すに帛、
我世どぞ思ふ此世をバ。

黄金の徳のたかければ、
いさ佛ぞと呼ばれたる、
法師も下坐にすわらせつ。

世にも醜き我ながら、
黄金の徳のたかければ、
花の少女の操をも、
破るにさしも難からず。

邸宅の美酒肉の歡、
心のまゝにふるまひて、

思へや野路をながし行く
 鉦のひいきの淋しきに
 花筒ならぶ山でらきの
 うしろの墓に入らむ時

壽命もどより限りあり
 分別おなじく限りあり
 はかなき富を待みつつ
 何をか計る露の身の

まなこ卑し下男の子
 高きをしへの法を聞け
 いましが壽命いくばくぞ
 いましが壽命いくばくぞ

光のなる光かやきて
 聞ゆる聲の不思議さよ
 たへなる光かやきて
 一つ一つの花びらに

根ざして咲けり金蓮華

おのゝかゝる人あり世にのしめ、
おのゝかゝる人あり世にのしめ、

何一人の富をむさる見よ、
何一人の富をむさる見よ、

ありし昔をそしるべし、
ありし昔をそしるべし、

誰かまことの涙もて、

獨りぞたどる死出の旅、
獨りぞたどる死出の旅、

見送るにただ墓山かぎり、
見送るにただ墓山かぎり、

我世と思ひし世の中も、
我世と思ひし世の中も、

なべて我身の仇にのしめ、
なべて我身の仇にのしめ、

友も妻もはらからしめ、
友も妻もはらからしめ、

黄金のひかりのみしも、
黄金のひかりのみしも、

冥路をまでの照さねが、
冥路をまでの照さねが、

こゝろの闇にとぼくど、
こゝろの闇にとぼくど、

ま◎そ◎よ◎こ◎
 こ◎の◎し◎の◎
 と◎真◎や◎人◎
 埋◎心◎一◎々◎
 め◎の◎世◎の◎
 し◎た◎に◎な◎
 玉◎ふ◎知◎す◎
 に◎と◎ら◎わ◎
 し◎さ◎す◎ざ◎
 て◎ん◎も◎ん◎

樂◎人◎お◎か◎
 し◎の◎の◎ハ◎
 こ◎ハ◎心◎人◎
 と◎ろ◎を◎あ◎
 は◎磨◎る◎世◎
 し◎ぬ◎く◎し◎
 な◎を◎め◎て◎
 り◎ハ◎

樂◎し◎き◎こ◎
 と◎に◎爲◎し◎
 ぬ◎な◎り◎

ま◎お◎か◎
 こ◎の◎ハ◎
 と◎命◎を◎人◎
 の◎を◎さ◎あり◎
 道◎ま◎げ◎世◎
 を◎も◎る◎に◎
 る◎を◎つ◎し◎
 が◎

樂◎く◎お◎か◎
 し◎し◎の◎ハ◎
 こ◎宗◎財◎人◎
 と◎教◎寶◎あ◎
 に◎を◎を◎り◎
 爲◎ひ◎な◎世◎
 し◎ろ◎げ◎に◎
 ぬ◎む◎ち◎し◎
 な◎る◎を◎て◎も◎

樂◎さ◎ち◎
 し◎き◎な◎
 こ◎き◎人◎
 と◎を◎め◎
 に◎爲◎し◎
 ぬ◎む◎を◎
 な◎り◎

あなと愕く折しもあれ、
 血を濺ぎたる鏡かな、
 いかる眼のさながらに、
 二つの角の生ひ出でて、
 頭を見れば真白なる、
 物の頬のあたりまで口さけて、
 頬のあたるまで口さけて、
 へりま動く牙二枚、
 かゝる形どなりぬらむ、
 こゝの浅ましやいのつものまに、

あつさ胸にや刻まれむ、
 あはれどいひて人皆の、
 さよき光や放つらむ、
 いつか千とせの史の上、
 この御聲をば身に、
 眺むともなく眺むれば、
 たたへし瑠璃の水底に、
 おもはずうつる我が姿、

煮○え○爛○れ○た○る○人○間○の○
 し○る○さ○屍○ど○う○か○ぶ○な○る○
 鼎○を○攀○ち○て○や○を○ら○我○が○
 立○た○む○と○す○れ○が○右○ひ○だ○り○
 鞆○を○は○ら○へ○る○幾○千○の○
 白○刃○の○鎗○の○こ○ゝ○ち○し○て○
 見○れ○ば○瘦○せ○た○る○細○さ○手○の○
 救○を○乞○ふ○も○か○し○ま○し○や○
 こ○ゝ○ろ○驕○り○て○今○の○た○だ○

猛○火○も○え○た○つ○池○一○面○
 世○界○み○る○み○る○暗○ら○が○り○て○
 は○や○ち○の○風○の○さ○ど○吹○く○に○
 た○へ○な○る○聲○の○人○の○泣○く○
 か○な○し○き○聲○に○か○は○り○つ○つ○
 花○ど○見○え○し○お○そ○ろ○し○き○
 鼎○と○な○り○ぬ○猛○火○の○上○
 青○き○湯○玉○の○こ○ろ○く○ど○
 薄○き○立○ち○か○へ○る○其○中○に○

湯玉の底にからく
 涼しく笑ふ人の声
 笑止や我を誰と見る
 ふるき世界の詩人なり

かくつふやきて又さぐる
 棒をこたひに握るらむ
 ひげをひけぬも動かぬに
 はてな疲れぬ我がひな

何者なれば斯るらむ
 一たびここに墮しければ
 賢愚貴賤を問はずして
 溶けはてぬいなきものを

うかぶ屍を探りつつ
 鼎の横に突き立てば
 あやしや把れぬ鉄棒に
 憂と咬みつくく物の音

飽かむどを思ふ人の肉

鬼の世をしも試さむど、
降りてここに潜みしが、
火にも焚けぬバ溶けもせず。
かくてこそあれ五萬年。

新宿より飯田町に抵る汽
車中の作。

まがね路を、みやこに入れバ、小車の、

窓のうちにも、ちるさくら哉。

洛北の山栖、梅花鶴瘦堂に
題す。

萬梅はなひらいて水清し。
鶴一聲月のほる。
しづかなるかな天地に、
ただ一人あり神と我。

人のもとより、めづらしき

珊瑚珠を得たれば、歌よみ

てよといふに。

いにしへに、神と戀せし、わたつみの、

涙やあかき、珠となりけむ。

笠堂と、涼を、芝浦の見晴亭

に取る。

欄干かざしきの、夕汐みちて、わたどの、

青きすだれに、月を見るかな。

曉に、江原道の唱道驛を發す。

(廿八年十二月作)

わが駒の、立つ髪みたる、朝風を、

白しと見れば、つらら下れり。

洛北の山栖にて。二首。

山鳩の、夢をひやして、しら櫳の、

ふる枝をたたく、むら時雨かな。

ぬす人の、ゑりたる壁も、なかくくに、

月見る夜半の、うれしかりけり。

山栖を、夜ふけて訪ふ人の

あるに。

松かせの、叩くとききて、柴の戸に、

ながくも君を、立たせつるかな。

われ一書を、三樹一平のために、

書くの約あり、期にいたりて果

さす。一平、わが放慢を責むること、頗る急なり。

鼎をも、あぐべき力、ありながら、

とる筆のみり、重くもあるかな。

無題二首

はかなしや、逢ふにかへむの、命をも、

人のさだめし、言ならなくに。

こえぬ間の、浪をたのむも、はかなしや。

ひとりちぎりし、末の松山。

知らせばや。磯の岩根の、さい波も、

こころの空に、寄すどばかりを。

親むかりし友の、秋になりて、

ふつと訪ひ來ぬに。

をりくいの、そよどだにさへ、音づれよ。

人のこころの、秋の夕かせ。

新年の宮中の御題『松影映

水』といふことをよみたる

中に。

玉をしも、わらそひかねて、老松の、

龍たつと見えし、水に入りけむ。

洛北の山栖に、薩人某と語る。

逢はむ日を、いつと知らねば、山里の、

うすき酒にも、ひと夜あかせよ。

周防にて教をうけし、敬信上

人のみまかりたまへるよと

きよて。

かりそめの、雲がくれぞと、知りながら、

入りにし月を、猶なげくかな。

死出の山、おなじ方にて、逢ひまさば、

道をしへてよ。母の老いたり。

徳川氏の舊臣某、その子の袴着に、

余を招きて、大弓會を催す。

はしき子の、けふの祝ひに、とる弓の、

八千代の我も、いのるなりけり。

威鏡道の紀行の中。

(廿八年十二月作)

おく山の、雪しづかなる、松が根に、

虎の跡あり。宿りなくして。

江原道に、要害の地多し。

(廿八年十二月作)

世に遇はぬ、わが身かなしや。籠るべき、

城ありながら、山ありながら。

仙臺の新歌人、佐々木獨尊

と話す。

壺のいしふみふみ分けて、

みればこの世も末の松。

しのぶ文字すり亂れたる、

歌のみちのく如何にせむ。

淺香の沼のあさはかに、

人のこころいなりはてて、

にはよことばの花がつみ、

かつみること難きかな。

名取の川の名にたかき、

道の博士い多けれど、

けふの細布むねあはぬ、

人ばかりなり歌の上。

誰しら河の關の戸に、

ひとり心を盡じつつ、

青葉の山のはとどきす、

われも音になく年ををるを。

無題

かねてより、逢ふにのちるす、命をも、

今の怨みに、代へつべきかな。

朝鮮の形勢、目を追て非なり。

京城なる槐園のもとに。

このごろの、からの城ふく、秋かせに、

言ふことあらむ。しばし忍べよ。

攝津の敷津の里にて。

里川の、蓼さくなきさ、霜見えて、

かたぶく月に、鴨ひとつ啼く。

三樹一平、法衛の職を辭して、その友
鈴木友三郎と共に、明治書院を東京
に創す。余の二たび韓山より歸るや、
一平、余のために周旋し、頗る懇懇を

極む。余の性疎放、細事にならばず。
一平の厚誼に負くもの多しとす。今
や明治三十年の新春に入りて、ここ
に、一平に貽るに、一部の『天地玄黄』
を以てし、聊か前日の謝意を致すと
云ふ。

大かたの、筆とる人に、ならはねば、

へつらふわさも、知らぬ我かな。

幼時、節分の歌に。

人みな、このころに鬼の、ありけるを

やらへば、おくと、思ひけるかな。

人にあたふ。

眞ごころを、花によそへて、見るべくが、

君のさくらの、外なかるらむ。

乾坤寥廓

「なにの不平にどうどうど、
空を鳴りつつ行きますや。」
霞の袖を膝にして、
月のやさしく問ひましぬ。

問はれて風の振かへり、
あかき毛脛を踏みしめて、
怒るまなこに朱を濺ぎ、
ふとれる拳さすりつつ、

不思議の問を聞くものか。
物をしづかびるところに、
人をまどはす神ありて、
世のわざはひを造るなり。

れ年のころその神を、

世界の外に追はむとて、
しづけき陰を見つけて、
夜晝わかす荒らびつつ、

さはるがまに蹴散して、
我が行く方に容捨なく、
はてな世界の物みなを、
微塵どなさむ願ひなり。

風のこどばの終らぬに、
苔の蒲團をかづきたる、

石の「しばし」と遮ぎりて、
沈みしこゑの重たげに、

そのあやまりぬ風の君、
我の斯くしも思ふなり。
もの噪しきところにて、
人のこのろの浮き立てが、

そこによからぬ神ありて、
人のこのろに魅いりつつ、
さまさまあしきさまが事を、

造り出づらむ授くらむ。

われは年をその神を、
捕へてくれむとばかりに、
眠ると見せて静かにも、
音ある方をまもるなり。

「風のかしらを横に振り、
否、君こそいあやまてれ、
心の静かなるところにぞ、
なかくあしき神の接む。

晝の大路に妖怪の
 出でし試しの聞かねども
 夕さびしき野邊にこそ
 人たぶらかす狐狸も啼け。

石の「あらず」と打かへし。
 静けき陰の悪しからば
 何しに人のむかしより
 山に入りても修行する。

もの噪しきところにて
 たがひに人の罵りて
 命をおとし血を流す
 いくさも其處に起るなり。

風と石とのあらしを
 見かねて月の進み寄り
 「やよ待ちたまへ兩君よ
 いささか申すことあり。」

面はゆげに俯視きて、

姫の仰せもいはれあが
 石のしづかに打見あげ
 耳かたぶけて聞きあたる
 やみある方を照すなり
 世界の上下を打まもり
 よるく天の戸に立ちて
 その神をしも追ははや
 禍なす神のいますらむ
 小暗さかげにあらはれ
 福なす神のいますらむ

年ごる胸にをさめつつ
 妾もおなじをさめつつ
 牙えたる聲の細やか
 おほけなけれと思ふや
 空にてります日の神の
 その御光のくまなきに
 晝のおそれて打ひそみ
 世の人みな寝しづまる
 夜のやみをが待みつつ

風の詞もいはれあり。

「さへ云へ我れの思慮も、
あやまてりどの思はれず。
何れかまこと何れをか、
まことならずと定むべき。」

「行手をいそぐ風にし、
突き立ちながら腕くみて、
げにや兩君われもまた、
惟しと思ふことのみあり。」

もの静かなるところに、
くまなく行きて求むるを、
また一たびも禍をなす、
神のすがたに逢はぬなり。」

「詞のしたに打けふる、
柳の眉をひそませて、
まこと妻もおなじこと、
禍なす神の見はべらす。」

香に氣ひのみちて屋のうちに、
 變ん化げの人にいませハか、
 家のやしなひかしづくに、
 竹のなかより兒を得て、
 竹とるわざをたつきにて、
 みやつこ磨と名を呼びぬ。
 みやこにちかき山里に、
 いやしき翁すまひけり。
 竹とるわざをたつきにて、
 みやつこ磨と名を呼びぬ。

石のはかに、
 見たまひつるか彼神を。
 しかのたまへバ我もまた、
 不思議とど思ふ年ごろを、
 ころ許さず守れるに、
 また二たびも彼神のに、
 うしろ影だに目に入らず。
 * * * * *

おのづからさす光明あり。
御名をばつけてなよ竹の、
かぐや姫とぞ申しける。

世界のものを富貴なるも、
いやしき人も打ききて、
この姫をしもいかで我が、
得てしかなどて愛で感ふ。

甲斐なき戀にあてがれて、
命すつるも多けれバ、

世にはづかしき行ひに、
其名くだすもあまたあり。

この人々のあはれをバ、
かぞへて翁のいさむれと、
思すどころやおはすらむ、
姫のいさゝかうけまさす。

時のみかどのきこしめし、
宣ひけるに「かぐや姫、
いくその人を憐すれ、

い、か、ば、か、り、な、る、女、ぞ、や。

勅使まかりて告ぐるやう、
「姫のかたちの優なるを、
見てまゐれどの仰せなり。
いかで對面得させなむ。」

おきな勅使にかしこまり、
入りて仰せを傳ふれば、
「まき容にもあらぬ身の、
いかで見えまつるべき。」

「世に住む人の誰ひとり、
國王の仰せをそむくべき。」
「世に住む人の誰ひとり、
國王の仰せをそむくべき。」

見てまゐれどの仰せなり、
いはれぬえとなし給ひそ。
かくと再びいひけるに、
「姫のいかでか聞きませむ。」

「そ○む○か○む○こ○の○悪○から○は○
 は○や○も○此○身○を○殺○し○ま○せ○
 み○か○途○の○仰○せ○な○れ○ば○と○て○
 き○よ○き○操○の○け○が○さ○し○よ○
 歸○り○て○斯○く○と○奏○せ○し○に○
 多○く○の○人○を○さ○る○し○は○る○
 心○ぞ○か○し○し○と○の○た○ま○ひ○て○
 想○ひ○た○え○そ○も○お○は○せ○し○が○
 猶○み○こ○ろ○や○か○か○り○け○む○

「女○は○ど○り○の○た○ば○か○か○に○
 い○か○で○負○け○む○と○宣○ひ○て○
 翁○を○召○さ○せ○た○ま○ひ○け○り○

「汝○が○も○て○る○か○や○や○
 み○め○麗○し○と○さ○こ○し○め○し○
 わ○が○御○使○を○た○ま○ひ○し○に○
 逢○は○で○歸○せ○る○い○と○に○く○し○」

み○か○途○の○仰○せ○か○し○こ○ま○り○
 翁○こ○たへ○て○申○す○や○ら○

「我子と假になのれども、
變化の人に侍るなり。」

この年を世の中、
まじはりたにも嫌へれ、
ましてやたかき宮うかへ、
うけひくべくも候はず。」

「みかど翁はのたまはく、
心にまかせぬことある。
たてまつりなむ翁は、

冠位をさへたまはせむ。」

「おきな仰せの嬉しさに、
歸りて姫にかたらへば、
世にいでてと思へるを、
なごか仕へむ宮づかへ。」

年を人のことらざし、
空しくして事こそあれ、
きのふけふなる仰せを、
うけひきなむも耻かしや。」

なほ仕へよどのたまは
此身のやがて消え失せむ
つかさ冠得させ置きて
妾の死なむばかりなり

「姫のことはにおどろきて
なのたまひそ我ほどけ
我子の世にしまさす
老の榮華もなにかせむ」

「翁みかどにまうできて
我なせる子に侍らねば
とかく心にまかせぬも
詮術なし」と申しけり。

かゝりしはどに帝に
深きたばかりおはしまし
ひと日俄かにいでまして
翁の家に入りましぬ。

光明まはもき中にしも

鏡に見る影と花の木
あやしや姫のみすがた
御輿をちかく召すほとに

帝のなごかさもあらむ
率てまはさやを思しつ
何じかまかせまつるべき

変化のものに侍るを
何じかまかせまつるべき

人の世界のものなら
みこゝろにしも従はめ

白き御手も世に似す
見えしと面ふたきま
袖をし捉へたまひしが

内へどのがれ給ふなり
近づきませばあなやど
たふとき人を見給ひて

人の世にしも降りな
 悟りやするとはかりしに
 人にまじればあさましく
 人のこゝろにならひつつ
 いつか神に魅入られて
 戀の闇をも造りけむ
 折しも夕日かたふきて
 世界をぐらくなりぬるに
 わらはか時となり侍る

あれどもどれぬ風情なり。

* * * * *

君々どよびませる
 姫のみこゑにおどろきて
 目ざむる石のかたはらに
 風もいつしか突き立てり
 姫のすわりてはほと笑み
 うたがふ心ときかねて

いでおん別れ申しなむ。

わらばの猶もまがつみを、
世界の闇に求めむと、
星のおもとをしたがへて、
姫の雲井へ出でましぬ。

「やくなきことに暇とりて、
世の静かにも成りけるよ。
車の音も絶えはてて、
鐘のひびきも打やめり。

そこのに猶も禍をなす、
多くの神やつとふらむ。
いでや我もと脛わげて、
風ふたたび馳せ出でぬ。

あどにのこれる右のしも、
おどろくと鳴る音を、
またも静かに臥しながら、
眠ると見せて守るなり。

漕歌

(廿九年十一月、本願寺文學寮の端
艇「秋月」「暮雪」「暗嵐」の三艘新
たに成る。漕手諸君の廻に應じて、
之が唱歌を作る。)

(上)

くろくも、おこれ、
くろくも、おこれ、
正義を、かくす、
くろくも、おこれ。
たかく、あかき、

八千代の、月、
いつも、か、れ、
大空の、上は。
猛火よ、おそへ、
猛火よ、おそへ、
世界を、やかむ、
地獄の、ほのほ。
清く、すいしき、
千とせの、雪、
いつも、すめり、

高嶺の上に。
 塵よ、けがせ、
 塵よ、けがせ、
 人を、まどはす、
 濁世の塵よ。
 ひろく、無碍の、
 萬古の風、
 いつも吹けり、
 世界の、上は。
 八千九百の、

月の、こころ、
 雪の、みさを、
 風の、氣象、
 この三つ、もちて、
 けふを、ば、はれど、
 あやどる、船の、
 われらの、まどる、
 いさまし、雄々し。
 (下)
 少女が、かなづる、

大、千、世、界、に、
 み、て、ら、む、火、を、も、
 そ、の、中、分、け、て、
 行、か、む、と、誓、ひ、
 忍、ん、で、つ、ひ、に、
 花、若、味、寄、大、こ、琵琶、
 腕、の、く、ろ、か、ね、
 山、に、さ、た、ふ、
 花、若、味、寄、大、こ、琵琶、
 腕、の、く、ろ、か、ね、
 山、に、さ、た、ふ、
 花、若、味、寄、大、こ、琵琶、
 腕、の、く、ろ、か、ね、
 山、に、さ、た、ふ、

花、若、味、寄、大、こ、琵琶、
 腕、の、く、ろ、か、ね、
 山、に、さ、た、ふ、
 花、若、味、寄、大、こ、琵琶、
 腕、の、く、ろ、か、ね、
 山、に、さ、た、ふ、
 花、若、味、寄、大、こ、琵琶、
 腕、の、く、ろ、か、ね、
 山、に、さ、た、ふ、

悔いじと説きし、
佛陀のこゝろを、
こゝろとせずや。

權に、したたる、
その露、ほども、
ひるひな共に、
幾代、まよへる、
生、死の、海も、
一、と、足、蹴、つ、て、
渡ら、わ、た、る、

われらの友よ。

野中千代子

(野中至氏夫妻の傳記「高嶺の雪」の後に題す。)

ほどけも許す妹と脊の、
愛どの何を云ふならむ、
神もめでます妹と脊の、
愛どの何を云ふならむ。
いくその人の昔より、
此なさけを、汲みかねて、
戀のあはれを、詩に歌に、

遺すもいと多きぞや。
 夫とよび妻とよびあふも、
 さらく人のわざならず。
 神もほとけも幾たびか、
 妹脊の道を説きましぬ。
 「夫の妻をしもいつくしめ、
 妻の夫をしもなぐさめよ。
 くるしき折も憂き折も、
 共にかたへ共に泣け。
 妻のことさら夫に代り、
 家のつとめを頼みつつ。」

親につかへてまめやかに、
 足らぬ事も無かれかし。
 子を育てなばこころして、
 庭のをしへを怠るな。
 人をつかへばいたはりて、
 よろづ恵みを加へよや。
 猶もわが夫どもろどもに、
 力あはせてひさかたの、
 月のかつらも折るばかり、
 家の風をバおこすべし。
 かかる妹脊の中にこそ、

まことの愛の宿るなれ
 玉なす鏡まどかなる
 睦びのいとど盡きざらむ
 花の木の間をうかれつつ
 蝶のもどむる蜜よりも
 甘さの妹脊のなさけにて
 人の樂園のここにあり
 このみをしへを降します
 高きみこゑの聞きながら
 ひかしも今もなつかしき
 愛のひかりのもどぬかぬ

春の野にもゆる若くさの
 かの若人のおほかたの
 失意の戀のやみにのみ
 さまよひ歎くあはれさま
 さの云へ月のみやこなる
 きよき臺にありとさく
 甘露のしづくたまに
 めでたき例ひき出でて
 さしも幸ある神の子の
 妹脊の上のめでたさを
 ここに「高嶺の雪」一部

綴れる書こそあかしけれ。
 端山しげやまふもとにて、
 青雲たかくそびえたつ、
 富士の高嶺の其すがた、
 誰か雄々しとたたへざる。
 かのいただきに年を経て、
 學びのために苦を辭せぬ、
 至のぬしの雄どころり、
 神のみわざに成り出でて、
 幾千代塵にけがれざる、

高嶺の雪のそのひかり、
 誰かきよしと仰がざる。
 か弱き身して脊のぬしの、
 その雄どころを輔けたる、
 千代子の君のけなげさ、
 雪のきよきになどらへむ。
 雪のひかりを添へてこそ、
 富士の彌々めでたけれ。
 千代子の君を添へてこそ、
 ぬしの増々たふどけれ。

師岡須賀子君の、國分操子君と並んで、淺香社閨秀中の雙壁なり。君毫も才學を衒ふの色なく、友人みな其謙徳を稱して已まず。夙くより女子教育に従事せられしが、この一月、越前の福井に赴任せらるると聞きて二首。

七重八重、もさのはなさく、三越路に、
歌のひかりを、そふる君かな。
しら雲の、八重山いかに、深くとも、

君よ一重に、われをわするな。

また彼地にり、我父の歌の友なりし、故
橋曙寛先生の跡あるを憶ひて。

梅の花、ひと枝たひけて、たちばなの、

翁が御墓、先づたづねてよ。

柳

守りすてて、朽ちし門田の、鳴子繩、

春ひく糸の、柳なりけり。

山吹

露ながら、折る袖にさへ、すがるかな。

蝶もやをしむ。山ぶさの花。

去年の暮に、跡見女學校にありて、生徒諸子の作『待春』といふ歌どもに、筆加ふるとて。

春かせり、おのがこゝろに、あるものを、

年あけなばと、人の待つらむ。

妹へつかはしける書狀のはしに。

くもりなき、鏡の上に、あやにしま、

着せたるはどの、心ともがな。

去年の夏、圖書館に、古人の傳記などを探りける折。

あはれその、恨もいはで、世を去りし、

むかしの人を、われり歌はむ。

寒夜に、朝鮮京城北門外の、大圓寺を訪ひて。
(廿九年一月作)

苔の戸を、月に見るやと、音づれて、

霜ふむ庭の、寒くもあるかな。

無題

雪ふらば、訪はむといひし、山ざとの、
人もや冬を、待ちわたるらむ。

備中玉島にてよめる

歌の中に。(廿四年三月作)

しじみ貝、こひぢを出でて、遊びあふ。

みぎはの梅の、さかりなりけり。

周防徳山にすみける春。

(廿五年二月作)

萌えそむる、門の雪まの、耳無草、

なく、鶯を、いかに聞さけむ。

全羅道紀行の中に、(廿八年八月作)

くだら野も、分くれや夏の、果ありて、

かりねの床に、まつ虫の啼く。

暑を、澁谷の里に避けて。四首。

風さよき、小松まじりの、くぬき原、

月さへ涼む、ところなりけり。

はかり得つと、思ふ水雞の、こゑやめて、

たたかぬ月を、窓に見るかな。

夏くれが、そともの岡の、権がもと、
妹の家より、したしまれけり。
やよくひな、小なき河骨、よき出でぬ。

月の夜ころめ、我も訪はれむ。

さる人に寄す

真ごころを、花によそへて、見るべくが、
君のさくら、外なかるらむ。

京城の南山に、櫻花多し。

韓人の、そをめでさるひ、
好尚の異なるなり。(廿八年四月作)

よるさとの、やまどに似たる、花れさけき、

大宮人の、歌なかりけり。

去年の冬に、居を靖國

神社のほとりに、移し

ける折の歌。二首。

うち見て、い、膝を容るゝに、足らねども、

やがて野山も、容れむ宿かな。

神垣の、さくらの紅葉、拾ひあげて、

むかしの人の、血潮とぞ見る。

無題

嵐ふく、峰のさくらり、ねたまれて、
世にふる人の、たぐひなるらむ。

中秋の夜、去年京城にありて、
船を漢江に泛べしことなを
追懐して。

河音の、さやなもる、月の夜に、

琵琶とりし子り、ありやあらずや。

落花

よみさせる、よみの業ど、なりにけり。

おのづからちる、花のひとひら。

全羅道の沖にて。

船の帆の、浪にさよふ、こちして、

初雪しろし。沖の島山。

跡見女學校の生徒諸子に、『殘菊』

といふ題を出しける折。

わすれても、冬どいはいはじ。庭の菊、

さらぐと色の、うつり行くらむ。

霜 (廿一年十二月作)

小木曾山、ふしと寒げに、熊どなく。

岩のはざまも、霜やさもらむ。

春曉

明けぬるか。月の露に、うすらぎで、

芝生の露に、春かせぞ吹く。

無題

立ちねらふ、鷲をもしらぬ、山猿の、

あやふさ書に、まよふころかな。

梅

年ごとに、身にもしむかな梅が香り、

親ののこせる、いさめならねど。

洛北の山栖に題す。二首。

月あかき、岩井の水に、かしの實の、

こぼれて浮くも、おもしろき哉。

世の人の、門をすぎても、訪はなくに、

なさけありける、夜半の月かな。

落葉 (十八年の冬の作)

さよしぐれ、すぎし板屋の、つまかげに、
なほ漏る雨の、木の葉なりけり。

子規

風みえて、尾上はなる、うき雲に、
こゑも消えゆく、山はとどきす。

攝津にすみける秋。(十九年八月作)

しのびかね、薄もいまの、穗に出でぬ。
秋にかたよる、世のけしきかな。

古の旅行に擬す。

蔦の葉の、しづくはらひて、飯いひもらむ。
夕立はるる、宇津の山でえ。

折にふれて。

梅さくら、ささちる花の、あらそひに、
ひとりもれたる、玉つばき哉。

秋の歌の中に。

もみぢ葉を、秋のこめたる、八重垣の、
尾上をめぐる、狭霧なりけり。

無題

ぬるまだに、亂さじとする、くる髪の、

ひとつはつれて、物思ふかな。

朝鮮より歸途、船、長崎を

経て馬關に向ふ。二首。(廿九年三月作)

わが船の、けぶりの末に、星見えて、

夕汐たかし。天草の灘。

硯の海、墨とながせる、夕浪に、

誰がとどめたる、文字の港を。

春思

春かせも、戀のなさけい、ありぬらし。

花の紅くも、もえにけるかな。

名所春月

(題詠)

月ばかり、色なき水に、かすむかな。

萩いむかしの、野路の玉川。

北國紀行の中に。

秋ならば、あらしを分けむ、月ながら、

かすみてのぼる、さらしなの山。

根岸にすみける春。

今ひとて、雁のむれたつ、澤みづに、

ひとり霞める、春の夜の月。

吉野に遊びて。(十九年四月作)

優婆塞に、ともなはれきて、我もまた、

さくらに籠る、みよし野の山。

無題

打なびく、柳のいとよ、心あらば、

思ひなき世に、くりかへさなむ。

瀬上雑詠の一。

おぼる夜を、あづま少女に、したはれて、

隅田河原の、花を見るかな。

月を、山城の巨掠の池に賞す。

あましといふ、蓮の根いでや、引きてまし。

をぐらの池の、秋の夜の月。

題書 (十九年冬の作)

瀧川の、岩にくたくる、月かけを、

つばさにかけて、なく千鳥かな。

槐園に寄す。

見ずや君、入江に生ふる、うき草の、

うきにも花の、さく世なりけり。

洛北の山栖に題す。

月かけの霞の上に、ほの見えて、

袖さむからぬ、花の雪かな。

霞 (題詠)

七重八重、こえてこし路の、八重山も、

みれば一重の、かすみなりけり。

無題

なるならぬ、秋のしらねぞ、さぐ花の、

去年にまさりぬ。軒の山柿。

僑居の冬。

にはどりの、あさる籬にかこぼれけり。

霜よりしろさ、しら菊の花。

京城にある、槐園の書を得て、

その返むに。

見ぬことの、かなしきよりの、なかくに、

君がまことぞ、袖ぬらしける。

さる人の許へ。

むさし野の、はちからよりも、むつまじき、

君をよそにも、思ひけるかな。

梅

人こふる、なさけならぬを、梅の花、

夜こそことに、香のまさりけれ。

洛北の山栖に題す。

立ちぬれし、花のしづくの、こちして、

朝日にとくる、松の雪かな。

船を漢江に泛べて。(廿八年七月作)

船の上に、月のなみだの、おつるよと、

思へば、權の、しづくなりけり。

春夕

さむからぬ、あらしに春の、日暮れて、

花の吹雪に、鐘かをるなり。

廿九年の秋、竹柏湖處子、雨江、
子規、桂月、羽衣、諸氏と共に新
詩會を、東京に創す。

あめつちの、鬼神おにがみこそわ、かたからめ。

土つちいかに人をも、泣かせしてかな。

天地玄黄終

附録

こほれ松 伊藤 落葉

寒梅一枝 佐々木獨尊

わか菜 金子 薰園

詩友、落葉生伊藤武一郎氏へ、職を海軍に奉じ、傍ら文學に志を托す。その詩の長きもの、尤も見るべし、『太陽』記者、曾て氏を推して、明治新體詩人の一人となせり。

獨尊佐々木潤氏の短歌、特に氣を以て勝る。懦弱なる方今の歌人中、稀に見るさころの人。

蕨園金子雄太郎氏の短歌、流麗を以て知らる。その近日の進境、頗る著しきものあり。

以上三氏へ、共に、恩師落合直文先生の淺香社にある人々なり。

丁酉一月

鐵 幹 生 識

◎とほれ松

伊藤 落葉

立武門

(明治二十七年十一月作)

平壤の城陥しつる、
その捷報にうちつゝいさ、
勳章授與の申し文、
賞勳局に上がりけり。
その戦功の第一に、
數まへられし人の誰。

立見將軍の率ゐたる、
朔寧支隊の二勇士よ。

千軍万馬平壤の

砲煙彈雨のその中に、

有明の月の影ふみて、

牡丹臺をバ乗り取りて、

直ちに向ふを武門。

路狭くして壁高く、

險を恃みてうちおろす、

初度の突貫功もなく、

門を仰ぎて腕まへて、

只かばかりの門一つ、

打碎きても入るべきを、

くやしや寄らむすべなしと、
 こゝろいらだつ一軍の士。
 「いかに此門堅しども、
 われに開く術こそあれ、
 かの絶壁を乗越えて、
 この門内にうち入りむ。」
 その言の葉も終へずして、
 直ちにすゝむ小隊長、
 險しさ壁のその下には、
 身をよりそへて手をかけぬ。

「やよ待ち給へ小隊長、
 命を輕んじ給ふなよ。
 此絶壁を越せどあらば、
 我にも術のあるものを。
 やよ待ち給へやよ暫し、
 様子知られぬ門内に、
 入る隊長をよそに見て、
 いかで兵士のあらるべき。
 われらが如き一士卒、
 よし失ふも一軍の、

方にかゝはることもなし、
 いざわれ先に乗り入らむ。
 我こそ先にと絶壁を、
 猿の如くに攀ぢのぼり、
 飛來る彈丸の雨あられ、
 物ともせず立あがる。
 この勢に恐れけむ、
 あたり近く寄せも來ず、
 敵の後へひさぐて、
 頻に彈丸を放つのみ。

小隊長も打つづき、
 彈丸雨注のその中を、
 くぐりて扉に近よれば、
 内より開く立武門。
 それ開きぬと一軍の、
 吶喊の聲いさまして、
 潮の如くによせかけて、
 打入るさまのすさまじさ。
 程なく見れば白旗の、
 風になびくも力なく、

かたしど云ひし平壤のけり
城の全くおちにけり

先登第一のそのはまれ

いづれ劣らぬ二勇士の

いさを賞せむその爲に

金鵒勳章第一等

友人小沼榮吾君を吊る。

(明治三十八年一月)

松吹く濱風磯うづ浪

音のひかしに變らねど

その下蔭に岩角に

ひどり兵書を播きて

心を戦のかげひさに

きたひし君や今いづこ

里わのけぶり門田の雨

色のひかしに變らねど

その曙に夕ぐれに

ひどり青史をくりかへし

まなごを古今の成敗に、
 さらしし君や今いづこ。
 われしらぬ火の筑紫瀉、
 佐世保みなどに君行くと、
 別を告げし面影の、
 今なほ夢に見るものを。
 山河隔てて三百里、
 そのみなどなる山かげに、
 無限の恨をふくみつゝ、
 昔の下にし君ありと。

思へばはかなき命かな。
 思へばつれなき人の世や。
 あはれ戦もあらむにり、
 海原どはく船出して、
 水雷一撃敵の旗、
 微塵にせむと誓ひしを。
 思へばつれなき人の世や。
 思へばはかなき命かな。
 あはれ戦もあらむにり、
 大海原にさまかけて、

逆まく浪のその中取、
 屍すてむと誓ひしを。
 海洋島邊、波荒く、
 北洋艦隊破りつる、
 戦の折、君わらば、
 あはれ功も立てけむを、
 折にあはざる武夫の、
 地下の恨やいかならむ。
 敵艦ひそめる威海衛の、
 深く乗が入りその様を、

探る此頃君あらば、
 時にあはざる武夫の、
 地下の恨やいかならむ。
 鐘の音さびしき夕まぐれ、
 君か心酔路のたひ月ふみて、
 椿かしの庵とへハ、
 梅が香さむさ朝風に、
 里川づたひ霜ふみて、

君がひかしの宿とへが、
落花をのせて水を行く。

椿

常盤の色に松の葉の、
みどりにも我も劣らぬを、

雪を凌ぎてさく花の、
梅にもわれぬ劣らぬを、

春雨さびしき夕まぐれ、
舞子の聲のほろほろと、

散る折ばかり歌はるゝ、
椿の身をそぐやしけれ。

山月

山松のこまきはなるゝ、月見れば、

我もしかこそすまほしけれ。

無題

川上の岩がさもみぢ、散らであらば、

赤きところも、世にのながれじ。

◎わか菜

金子 薫園

春のくれに、友の旅する
おをくりて。

駒どめて君が袖にやはらふらむ

いくその里の花のしら雪

落花の歌の中に。

うけて舞ふ天つ少女の袖もがな

おぼろ月夜に櫻ちるなり、

夏のほじめ笠置山にも

霜のしで。

露ならで袖ぬれけりいにしへを

しのぶかさぎの山郭公、

夏の歌の中に。

ながれ江の芦間の水にもふ月の

影もよどみて水雞なくなり、

すしさの行へも見えて墨田川

水上どほくとぶはたる哉、

月夜、竹柏園主人と共に、

武島羽衣ぬしをとひけ

るとき。

かたりあふ心のそこの隈なさを

見せてもてるか秋の夜の月、

一葉女史の身まかられ
たるころ。

雲井より笙の音すなり君のいま

月の御船に棹やさすらむ、

古戦場。二首。

旗すゝき風になびきて今もなほ

むかし覺ゆるさちかうが原、

矢叫のこゑにかよひて今もなほ

荒浪さわぐ武庫のうら風、

折にふれたる。

こほろぎの聲もよわりこしの夕

桐のくち葉に村雨のふる、

照る月をこゝろどころにしのぶらむ

聲ちぐさなる野邊の虫哉、

柿の實の三つ四つのこる枯枝に

おく霜白し冬やきぬらむ、

亡友富本松濤の三年の

忌に。

君を悼みなくくかきし水莖の

跡も乾かで三年へにけり、

擬管中作。

たさすてし簪のけぶりかつきえて

雪よりしろし今朝の初霜、

◎寒梅一枝

佐々木獨尊

折にふれて。

勅ちよくといはば、猶なほいくたりも、平壤へいじやうの、

城戸まきどおしあくる、臣おみありなむ。

松島にもものしける折。

もしはやく、煙けむりいたえて、千賀の浦や、

汐干しほひのかたに月かたふさぬ。

宇治川にもものして。

武夫ぶふうの、ささがけせしり、こゝなれや、

今もさかまく、宇治の川浪。

折にふれて。

大丈夫だいしやうぶの、紅あかさなみだも、世の人の、

色ある露と、見てや過ぐらむ。

擬從軍行。

秋をたかみ、肥えたる駒に、鞭うちて、

北のみやこをさして行く我り。

折にふれて。

大空に、羽うつ金鷄とびの、聲きゝて、

おくれし鷺の、何さむぐらむ。

おのれ病に罹り

て、惱みける折。

召しまさば、我も御國の、美精とぞ、

おもへばいまだ、死なれざりけり。

思ふことありて、柳の歌よめる

中に。

青柳の、世にあらそはぬ、心をば、

靡くとのみや、人の見るらむ。

源義家

言の葉の、ひかりもそひて、武士の、

よろひにかゝる、花のまら雪。

春 月

さく花に、おのが光りや、もづるらむ

おほろにかすむ、春の夜の月。

小督局

つれづれの、友どしらべし、玉琴も

雲井こひしき、音をや立てけむ。

折にふれたる。

世を捨つと、人のいへども、世の中に、

すてられたるが、多きなりけり。

太刀をのぞひける折。

太刀のいざ、さてもありなむ。佩く人の、

心の錆を、とぐよしもがな。

時鳥をさきて、

太刀なでて、物おもひをれば、時鳥、

血になく聲や、誰にならへる。

安達が原をよぎりて。

すむといふ、鬼もなくらむ。さ夜ふけて、

狐火さむき、黒塚のあたり。

鐵幹子と連歌の中に。

山おろし、そのはて語れ。われもまた、

(鐵幹)

この世の外に、いなむとぞ思ふ。』

(獨尊)

叱りつゝ、やりし少女の、うしろかけ、

(鐵)

なきて見おくる、母もありけり。』

(獨)

ねむるとのみも、思ひけるかな。

(鐵)

伸びたゝむ、虫のまばらく、屈む間を、』

(獨)

その腸の、ぐるくやあるらむ。

(鐵)

いさめても、紅き涙の、なき人い、』

(獨)

文よむ世々の、人も泣かさめ。

(鐵)

益荒男の、棺ひつぎかぶりて、後にこそ、』

(獨)

折にふれたる。

忘れてり、人の折るらむ。姫百合の、

花にまがへる、鬼也りの花。

歸雁

かへるさの、雁の羽風も、にはふなり。

都の花も、今かさくらむ。

祖父の葬の日、雪まぢりに雨ふり
 へけれが。

涙をが、見せじと思ふ、袖の上に、

けまなくふる、今日の雨かな。

旅の歌の中に

おほくちの、まがみ友よぶ、山にして、

松の火今か、さえむとすらむ。

天地立黄附録終

おのれ病に罹りて嗜血しける折

なかくくに、血をし吐かずが、國を思ふ、

赤さこゝろも知られざらまし。

評家諸君に懇請致し候ふ。

謹啓、昨年の夏に、小生の悪作『東西南北』に對して、かすかす過分の御評言を賜りしが、省みて自ら感奮警醒いたし候ふところ少からず、御厚情のはと、千萬御禮申し上げ候ふ。御評言は毀譽何れに論なく一々『友言』と題もて、次の如くに印刷せしめ、永く紀念の料を仕り候ふ。

茲に『天地玄黄』一部を、左右に拜呈いた

し候ふ。何卒御清暇を以て、御一閱をたまひ、
例の御叱正をも垂れられ候はば身に餘る
幸榮に心得べく候ふ。本書に對する御評言
もまた、再版の節印刷に附し度と存じ候ふ
につき、恐縮ながら發行書肆へ宛て、御惠投
下され候ふやう願ひ上げ候ふ。拜具。

明治三十年一月

與謝野 寬

友 言

諸新聞雜誌の批評

◎國民之友八面樓主人君

與謝野鐵幹とは如何なる人ぞ、其

の詩集「東西南北」に散見するところの題目、若くは風味に據りて觀る時は、渠ハ嚮
に朝鮮政府の聘に應じ、學部衙門の教官として日本語の教授を擔當し、其國の權
官俞吉濬、趙義淵の人々と結託し、日清風雲の際、自ら奮ひて韓政府のため畫策
斡旋したる志士なるが如し。その「東西南北」ハ其平素題咏の作、朝鮮にあつて、
故國を歸つて咏するもの、從軍諸作、雜什等、短歌新詠詩數百を輯めたるもの、名
けて「東西南北」といふ所以は、其風味する所の景物、日韓兩國の天地に亘るの故
を以てなるか。

渠が自個を以て聽する所の自序に據るに、渠ハ素行都の人、幼年より歌よむとを學

二
び、其の凡て今日まで讀む所の短歌ハ、七千首以上なるへしといへり。その東京に來りて、時の歌人落合直文の門下にあると十年一時、現代諸家の所作を批評し、宮内省派(といふもの)これあるか)を攻撃するに由り其名を知られ、後二六新報紙上に其自家の本領を發し、幾ならずして朝鮮へ赴き、朝鮮へ在つて亦曾て詠誦を廢せず。却て曰く。

歌千首、かきて藏めし、から山を、

また行くまでは、虎やまもらむ。

朝鮮より歸りて、人の後來の處世を問ふに答へて、

さればとて、山に入るべき、身にもあらず、

しはしハ歌に、また隠ればや。

然して今歌集を公にせり、渠は歌人なり、誰か渠を歌人ならずといふや。然るに渠は獨り自ら稱して、曰く。

小生は詩を以て世に立つものにあらず候へとも云々、
斯の如きの語ハ往々太たしき謙遜より出てたるにあらんは、太たしき傲滿より出つ。鐵幹その孰に居れるものぞ。

吾人は固より鐵幹の人となるを論究するの必要なし、然れども其自序に於て、自家を稱道して些の畏れ憚りなきを見るに、極めて倨傲なる一漢子の面影に浮ひ來るを如奈せん哉。殊よ其未尾附記して、

明治廿九年六月十七日、東北、宮城巖手青森、諸縣、大海嘯の慘狀を想像し

つゝ、著者自ら東京の寓居に識す。
といへるを讀みてハ、頗る渠の讀書社會に對して眞摯を欠けるを嘆ぜざるを得ず。渠豈に二個の頭顱を有して、其一を以て大海嘯慘狀を想像し、同時に他の一を以て自叙文を構案したりといふか。

渠の短歌は頗る漢詩の感化を受けたり、唯よ其詞に漢詩の詞語を移植したるもの多のみならず、其組織、及び風神すらも、漢詩の系統を曳けるもの些とせず。然して新體詩は全然漢詩の五言古詩の體を採り、その二三の調を翻して、七五の調をなしたるなり。

蓋し漢詩を以て新體詩を作るもの、響に國民社に於て停春樓主人あり、今此作家あり、共に斯道に一新機軸を寄附せるもの。

「東西南北」の叙を聚むるもの、自叙を除きても十家の多きに達す、其中井上哲次

郎氏のこれを冷遇し、鷗外の其發達をこれを危ふみ、正直正大夫の之を刺るあるが外落合直文氏はその優に風雅の域に入れるを賞め、大口鯛二氏は其の自在を稱し小中村義象氏はその新奇を喜び、坂正臣氏はその雄宕大風の如き調ならんことを推測し、正岡子規氏は風木葉を振ふが如きといひ、國分青崖はその清新を愛し、佐々木信綱氏は「東西南北」の高く諸家の詩卷を超絶せりと云ふ、然してその雄壯なる調を得たりといふに至りて、諸家皆一々に出るが如く、作者自身亦其擅長を誇稱して、

韓にして、いかでか死なむ、われ死なば、
をこの歌ぞ、また廢れなむ。

これ等を觀れば、世間の渠を許せる程、渠自ら許せるほどの全約を知るに足るへし。渠自から世の定論に満足せずして、「眞面目なる詩的批評」を與へと云へり。詩的批評とは如何なる批評ぞ、こゝわが解する能はざるもの、然して吾人の是非亦果して渠の望む所の詩的批評なるや否を知らず。
渠其の自叙に於て曰ふ

「小生の詩は短歌にせよ新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の粕糟を

嘗むるものにもあらず、言ハハ小生の詩は即ち小生の詩に御坐候ふ。古人の樂ける土莖を去りて、自家の据へたる基礎の上立んと欲する鐵幹の勇氣愛すへし。然れどもこは實に考へるなり。わが國風ある既に二千首、其間些の變遷にあるにもせよ、大歌人の鼓吹によりて、國風ある既に二千首、其間些あつて二なきものなり。漫然として古人の爲る所を離れ、自然の外に自然の調ハ一自我を立つ、後の悔を生ぜずんば福なり。悔を遺さるるもの殆ど稀なり。鐵幹既に

既に自我を立つて、盡く過去の形式の束縛を脱し、舊套の鐵枷を碎く。題を採り意を命ずることの自在にして清新なるへきは、固より當然なることなり。吾人も亦この小詩卷に於て、許多愛誦すべき佳什あるを掩ふ能はず、試に其一二を擧ぐれば、

野に生ふる、草にも物を、言はせばや、
涙もあらむ、歌もあるらむ。
うるはしく、心もたむ、飛ぶ蝶を、
まねくも花の、にほひなりけり。

雲はみな、浮世に出でて、山里に、

のこるは月と、我をなげけり。

口もきて、たゞ笑ははや、我をちの、

泣きて甲斐ある、この世をらねり。

富士の山、のぼりもはてぬ、まら雲は、

麓の峯の、さくらなりけり。

夕かせに、尾花の袖は、まねけとも、

暮れゆく秋は、まらさるらねり。

山里は、松ふく風を、枕にて、

夢にも塵は、かからさるらむ。

梅の花、ただ山里に、植ゑれかむ、

世を厭ふ時、きても見るへく。

いだつちに、我は死なしと、誰もらへん、

名もなき墓の、多くこそあれ。

思はずは、忘れはてとも、ありぬへし、

そあるも人の、なまげなるらむ。

等、及び桃園との連歌の如き、新体詩に於ては「野菊」の如き

まねくたもとの花すすき、

なまめく色の、をみなへし、

よその榮え、うらやまじ、

ものにはもの、限りあり。

野菊のいづも野菊にて、

ひとりかをらむ、岩かけに。

(批圈點ハ原文に據る)

これその皆謂はゆる清新愛すへきものなり。然れどもその清新にして愛すへき所
以は亦能く自然の調に入れるか故にきて、その自我の上にあるか故にあらず
渠の自我は渠に是等敷ふへき佳什を興へて、然も無欺乱調の歌を興へぬ。鍊らさ
る歌あり、聞えぬ歌あり、たゞ言あり、漢詩ともつかす和歌ともつかぬ、鶴歌あ
り。鍊らざる歌の例を擧ぐれば「韓にして如何でか死なむ」十首の中、第八首、第
十首を除ける外の八首に於て、その第一句は、殆ど盡くすえとあらざるを見る。

即ち、其一首を拔萃せんに、

韓にしていかでか死なむ。われ死なば、

をこの歌ぞ、また廢れなむ。

韓にえていかでか死なん。一たびハ、

母にみやこの、花見せハヤ。

前者は必ずしも韓ならずともといふべきもの、後者は韓にしては不可なるもの、他の六首亦皆二者の一を免れず。聞えぬ歌の例をあぐれば、

あら浪の、八重の汐路も、まどろみて、

見れば見るべき、夢はありけり

ゆめさらく、歌に朽つへき、身ならねど、

かわゆきものハ、櫻なりけり。

親こひし、妻こひしとも、語れかし。

月はいたくも、さえにけるかな。

タ言の例をあぐれば、

な故に、ふみはよむやと、こころみに、

さくはは人の、いか答へむ。

威海衛、つぎし御艦に、君ありと、

さくしは月の、初なりけむ。

漢詩とも和歌ともつかぬ鶴歌の例をあぐれば、

十五絃、月に強する、人もがな、

秋風ならぬ、水なかりけり。

野をゆけば、朝露をよし。すたれたる、

など、吾人はこれを亂調の歌といふ。もし嚴格なる意味に於ては、是れ果して稱して歌と目すべきものなるや否や、ただ疑はしく唯鐵幹に於て歌なるべし。吾人之に就て云ふべき所を知らず

渠は「われ死なば、をこの歌をまた廢れなむ」と、自貢して、自ら雄壯の調を得たりとし、人もこれに附和して、渠雄壯なる調を得たりといへり、然れども不幸にして吾人は未だ鐵幹の雄壯の調を解する能はず、吾人は其の雄壯の調なるべきもの、徒に輕佛淨源にして、其意其辭多く出スベリしつゝ流れ去るを觀るのみ。